

「国語科教育法」における取り組みと課題

三木 麻子

MIKI Asako

本稿では、本学（夙川学院短期大学）児童教育学科の講義「国語科教育法」を受講する学生の意識の変化とそれに応じて変化させた授業のあり方を報告する。そして、より実践力を求めるようになった近年の学生に対し、いかにして教育実習での学びに対応してゆける力をつけてゆくのか、具体的には指導案を作成し、国語の授業を組み立てるために学生自身がどのような点に留意してゆけばよいのか、という観点から行った稿者の授業とそれに対する学生の取り組みと課題について考察する。

キーワード：国語力、指導案、模擬授業、能動的な授業参加（能動的学修）

1. はじめに

本学、児童教育学科では、保育士資格・幼稚園教諭二種免許・小学校教諭二種免許の三種の資格・免許が取得できる。学生は入学時に希望する資格・免許に応じて授業を選択し、資格・免許取得に必要な科目を履修してゆく。実習も同様であるが、幼稚園・小学校の教育実習に関しては、いずれかの実習先を選択すればよいので、就職先として希望する校種への実習を選択するよう指導される。つまり、幼稚園であるのか、小学校であるのか、その実習先によって入学当初の学生の希望する就職先が判明することになる。

当初と述べたのは、小学校での実習を行った学生が、保育実習を通じ、保育園への就職を望むようになる場合もあるからである。

また、保育士や幼稚園教諭を目指す学生は、就職後の必要性を鑑みて、保育士資格・幼稚園教諭二種免許の両方を取得することを指導されるので、就職先を幼稚園か、保育園かで迷うようになる場合もある。

その場合でも、幼児教育を中心に、先生として人と関わる仕事に就きたいという明確な志望を持って入学する学生は、単位の取得状況などにより希望を変更せざるを得ない場合も含め、三種の資格・免許のいずれかを生かした専門就職をする。

保育園・幼稚園のいずれにせよ、幼児教育を志す学生が大半であるので、小学校での実習を希望する学生の数は入学者（定員170名）の1割以下である。

しかし、意欲のある学生は幼児教育に隣接する小学校での学びを理解するために、小学校教諭免許取得に必要な科目を履修してゆく。そして、実習先が幼稚園であっても小学校教諭二種免許の取得は可能であるので、三種の資格・免許を取得して卒業する学生も確実に存在する。

また一方で、小学校教諭二種免許取得に的を絞って勉強し、教員採用試験合格までをめざしている学生も増加している。

ちなみに、かつて児童教育学科は、幼稚園教諭二種免許を二年間で取得し、卒業後、一年間の専攻科（保育専攻・2013年3月廃止）に進学して保育士資格を取得する制度であった。コースとしては、「幼児教育コース」の他に、「初等教育コース」が設けられていた。「初等教育コース」は、二年間で幼稚園教諭と小学校教諭の二種免許の両方を取得することができるコースであったが、40名前後入学していた「初等教育コース」の学生たちも、三年目に専攻科に進学し、保育士資格を取得した後は保育士への道を進む者が多かった。「初等教育コース」があった時よりも、特にコース分けをしていない現在の方が逆に、真剣に小学校教諭を希望する学生が漸増している印象がある。

2013年4月専攻科がなくなり、二年間で保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格が取得できるようになった年度がスタートしたが、この年から本学は男女共学にもなっている。そのため、2013年度は、他の職業経験があったり、四年制大学を卒業し、中学校・高等学校の教員免許や他の資格を持っていたりしても、小学校での教育を志し、小学校教員免許を取得するために入学する男女の社会人学生がでてきた最初の年でもあった。その社会人入学生の意識の高さが他の学生による刺激と影響を与えた結果、一般の学生にも小学校教員に興味を持つものがでてきたと思われるからである。

「2. 教科教育法の選択」で、その実態を見てゆきたい。

2. 教科教育法の選択

さて、国語科教育法が含まれる「各教科の指導法」は、音楽科教育法、図工科教育法、体育科教育法のうち2科目を含んだ上で、9科目のうち、いずれか6科目が免許取得のための必修となる。つまり、国語科教育法は、音楽・図工・体育を除いた、国語科・社会科・算数科・理科・生活科・家庭科の6教科の教育法の中から、3～4科目選択される中の1科目となっている。

選択必修の科目ではあるが、小学校校教諭を志す学生は、全ての科目を選択する場合が多い。

二年間で三つの資格・免許が取得できるようになった2013年4月より、国語科教育法を履修した学生の数と最後まで授業に出席し、模擬授業を経験し、レポートを提出して単位取得できた学生の数を比較してみると、次の表1のようになる。

(表1) 年度別登録者数と単位取得者数

年度	2013	2014	2015	2016
登録者数	32	13	31	48
単位取得者数	31	11	30	35

コース制がなくなったにもかかわらず、国語科教育法を選択する学生数にあまり変化はない。2014年度は減少しているが、単位を取得した学生は、毎年授業の中心となって積極的に参加する、三つの資格まで取得する学生がほとんどであった。そして、2015年度からは、幼児教育を志す上で追加的な学びとして小学校免許に関わる科目を選択する学生を含んでの受講者数に戻っている。その中でも2016年度はその数が増え、授業の中心となる学生も増加していると思われるが、こ

れは卒業時まで結果は見えない。

一方で、本学では、幼稚園教諭免許を希望する学生にも「国語」「算数」「生活」の3科目から1科目を選択することを必修としている。国語に関して言えば、一回生の前期に国語(教科)を履修した後、国語科教育法は、後期に履修するよう配置されている。

その中で、3科目から1教科の選択をする際、全ての教科を学ぶために必要な基礎が国語力であるという理解が行き届いているためか、また、教科のうちで国語は取り組みやすいと感じる学生が多いためか、国語を受講する学生は少なくない。

しかし、逆に、選択必修科目の1つであるために、前期に国語を履修していない学生が、国語科教育法のみを受講する場合もあり、教科の国語から国語科教育法への段階を踏んだ学びが必ずしもできているわけではない。

そして、先述のように、教科教育法を受講する学生の中にも、小学校での実習を行う学生とそうでない学生が存在する。

どこで教育実習を行うかによって、授業参加への意欲が左右されるものではないが、2016年度の場合、48名登録した学生の中に温度差があったことは事実である。入学時に資格はできるだけ取得しておいた方が就職に有利かもしれない、という判断をして履修登録をした学生も、本来、自らが進みたい方向が見えてきて、小学校教諭免許取得を選択しないこともある。国語科教育法で最終的にレポート提出まで終えた者は35名になった。

同様の現象は、教員採用試験合格に不安を持って、私立園での採用が多い保育士を志していた学生が、小学校に教育実習に行ったことで、あえて就職には困難な小学校教員への道を志すこともあって、学生が志望を自ら決定したときの力は計り知れないものがある。

このように、就職希望先も、取得する資格や免許の希望も多様な学生たちが受講する国語科教育法をどのように指導すればよいだろうか(註1)。

3. 授業計画

今年度のシラバスでは、次のような授業計画を展開している。

1. 国語科教育とは
2. 国語科教育の歴史
3. 国語の中の古典

4. 教科書を使った「読む」授業
5. 教科書を使った「ことば」の授業
6. 国語科学習指導案の形式と書き方 実例1
7. 国語科学習指導案の形式と書き方 実例2
8. 教科書研究—教材を選ぼう
9. 学習指導案を書いてみよう
10. 学習指導案を書いてみよう
11. 模擬授業
12. 模擬授業
13. 模擬授業
14. 模擬授業の反省
15. 言葉の遊びを授業に生かそう

これは、例えば、教科書指導法シリーズとして出版されている『小学校指導法 国語』(註2)が、

I 国語科教育の理論と方法

- 第1章 国語科教育の意義と役割・・・1
- 第2章 国語教育の目標と内容・・・1
- 第3章 学習指導要領に基づいた学習指導計画
- 第4章 国語教育の指導法と評価

II 国語科教育の実践

- 第5章 話すこと・聞くことの指導・・・△
- 第6章 書くことの指導・・・△
- 第7章 読むこと—説明的文章の指導・・・4
- 第8章 読むこと—文学的文章の指導・・・4
- 第9章 読書指導
- 第10章 伝統的な言語文化の指導・・・3
- 第11章 国語の特質に関する指導・・・5
- 第12章 言語活動の充実を目指した実践・・・15

と章立てで示す国語科指導法に必要な事項を最低限取り入れつつ(シラバスの授業回数を右に入れた)、学生にとって重要と思われる模擬授業までいれようとする計画である。しかし、当然網羅できていない内容(△で示した)もある。「話すこと・聞くことの指導」「書くことの指導」(△印)、そして、稿者がもっと充実させたいと考えている「読むこと」の指導は学生が模擬授業に採り上げた具体的な教材の中で説明することとした。本来は、講義であらかじめ指導方法を示し、実践へと段階を踏みたいところである。

ただ、受講生が30人を超えるクラスで、一度でも学生を黒板の前に立たせようとするれば、講義部分をコンパクトにせざるを得ないし、また、模擬授業も複数名

によるグループ分担になる。これは、あくまで45分の授業実践を学生に経験させるための措置である。

本学の学生は、大人の予想のつかない反応をする子どもたちと関わる際に必要な、現場での対応力に優れた者が多く、そうでない学生も、実技系科目を履修する中でその力を培ってきている。しかし、資料の周回な読み込みなどを苦手とする学生も多く、その指導が必要となってくる。それには、90分の講義に慣れた学生に小学校の1校時の長さ(短さ)を実感させ、それを埋めてそこにやるべき課題を配置してゆく難しさを体験させることが有効である。授業準備があつてこそその応用であることへの学生の気づきに繋がると思われるのである。

4. 授業実態

ここでは、模擬授業をするために、学生が能動的に関わらざるをえない内容について述べる。理論や説明だけでは理解が困難な学生も、実際に自分が教壇に立つことを前提とすると真剣さが増してくるのであるが、指導案を書いていく中で、でてきた課題の一つが学習指導案の中の「活動計画」である。

4-1) 活動計画

学生には、ある小学校の研究授業で使われた模範的な学習指導計画を配付した。小学校教諭が作られた「ありの行列」の授業案をもとに、教材を読んで、1時間の模擬授業をなぞっていくのだが、その前提として「単元の指導の過程」を考えることを指導する。

それは1つの教材をどういう流れで指導するか、という活動計画を立てることである。そして、模擬授業をする1時間の授業が、全体の流れの中でどのように機能するかという視点を持つことでもあるが、数時間をかけて1つの教材に取り組んだことのない学生にとっては全体の通しが立てにくい。

今年度、学生が使用するテキストは、光村図書の3年生用教科書「国語 下 あおぞら」を指定しており、学生は模擬授業をするための教材をここから自由に選択した。

光村図書が出している「学習指導書」を参考にさせた場合でも、「ちいちゃんのかげおくり」という「読む」教材の指導計画には、

「物語の感想を書き、交流する」(I案)

「音読劇の発表会をする」(II案)

という2つの案が示されている。そのため、学生には

どちらを選べばよいのかという混乱が生じるのである。ここでは、最終的に児童が物語内容を理解し、何かを「感じる」ための手立てとしての「学習活動」であり、「指導」であることへの理解が必要となる。

しかし、この部分は、学習指導書を参考に書き写す、という形にしかならない場合が多い。この点はいくつかの教材や授業を経験する中で創意工夫ができるようになると思われるので、他の学生の模擬授業を通じて学ばせることとした。

しかし、それを巧まらずして乗り越えた例がある。それは教材を「きせつの言葉 冬の楽しみ」や「漢字の意味」という「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」から教材を選択した場合である。1～2時間で学ぶ単元は学生にとって取り組みやすいものであるため、今後は短い単元から段階的に「読む」「書く」「聞く・話す」単元へと進むように、教材を分けて経験させることが必要であるだろう。

4-2) 本時の設定と展開

次に、指導計画のなかで、もう一つの大きな要点が「本時（模擬授業を行う時間）の計画」となる。

表2は、学生がどのように「本時」を設定したかの一覧である。

(表2) 模擬授業の「本時」

単元数	組	単元名	日程	本時の設定	全活動時間
1	1	季節の言葉	11月25日	1	2
	2		12月2日	1	1
2	3	漢字の意味	12月2日	1	2
	4		12月9日	1	2
3	5	ちいちゃんのかげおくり	12月9日	1	12
	6		12月16日	3	12
	7		12月16日	3	7
4	8	すがたをかえる大豆	12月23日	4	10
	9		12月23日	3	7
	10		1月13日	1	7
	11		1月13日	3	7
	12		1月20日	6	6
5	13	三年とうげ	1月20日	1	8
	14		1月27日	1	4
	15		1月27日	2	6

*「本時」の設定とは4-1)にあげた「活動計画」の中で、何時間目を模擬授業とするかを定めることである。

基本的に、グループ分けも学生の意思に任せ、教材は学生たちが自由にテキストから選ぶようにしたので、4-1)で述べた教材の他に「物語」「説明文」「昔話」などの教材が選ばれた。

また1組は1人から3人の学生で構成されるが、1人グループは1組だけで、あとは参加をやめた学生もいる中で随時グループを編成し直して2人で担当した組が多かった。

ここで問題になるのが、本時の設定である。教材全体を指導する活動計画の中で、何時間目の授業を模擬授業の時間に充てるか、という選択で、導入の時間である1時間目を選んだ組が多かった。導入の時間で、著者について関連作品を示す、全体を読んで、初発の感想を問う、新出漢字を学習する、という比較的授業しやすいところを選んだ感がある。

「すがたをかえる大豆」で各組が設定した「本時」は(表2)の単元4、8～13組を見ると分かるように、4時間目、3時間目、1時間目、6時間目と見かけ上は異なっているが、後述するように実際の模擬授業では、拡大した写真・図版を用い(インターネットから採取したため、手書きを用いた組以外は、複数の組が同じ写真を使用している)、すがたをかえた大豆の加工品を示してその多彩さを知らせてゆくという展開を見せた。

1時間目に写真・図版を見せて内容に入っていくのは、予想される展開であるので、次に、一例として、単元4「すがたをかえる大豆」の8組と12組の指導案を掲げてみよう。

(8組)

「活動計画」の記述(抜粋)

2次4～5時の学習活動

- ・①～②段落を読み、大豆が色々な食品に姿を変えていることが多いので、気づかれないことを読みとる。
- ・普段の食事では、どんな食材が多く使われているか調べる。

指導上の留意点

- ・食生活に興味を持てるようにする

「本時の展開」の記述(抜粋)

4時の学習活動

- ・食べ物クイズを通して、身近な食材に興味を持つ。

4時の学習への支援と指導上の留意点

- ・クイズを通して、食に興味をもてるようにし、どういった加工の仕方で、みんなが知っている姿に変わっているかを、わかりやすく簡潔に説明する。
(中略)
- ・大豆を持参し、生徒に見せ、触らせたりし、関心をもたせるようにする。

(12組)

「活動計画」の記述 (抜粋)

2次6時の学習活動

- ・⑦～⑧段落を読み大豆がいろいろな食べ方をされる理由を読みとる。

「本時の展開」の記述 (抜粋)

6時の学習活動

- ・前時までの学習をふりかえる。

6時の学習への支援と指導上の留意点

- ・これまで学習したことを想起させる。
- ・大豆の食べ方のくふうで、最初は大豆をそのままいたり、にたりしているが、徐々に粉にするなど、工程が複雑で時間もかかるようになってきていることに着目させる。

☆①～⑦段落の内容を覚えているか

- ・⑧段落を読み、大豆はなぜ、多くの食べ方が工夫されてきたのか理解させる。

4組は①～②段落、12組は①～⑦、⑧段落を扱おうとし、明らかに一方は内容の導入、もう一方は振り返りを意図しているのに、理解を深めようとする工夫が、同じような写真や現物の提示になってしまっているのである。

ただ、12組の展開は、写真・図版を並べるだけに終わらず、大豆加工品の写真を並べ替えて、加工「工程が複雑で時間もかかるようになってきていること」まで気づかせる工夫があったので、優れた模擬授業になっていた。

さて、同じ教材を選んだ組のなかで、本時の設定が一定の時間や展開方法に集中することへの対応策としては、稿者が教材を決めて、学習に必要な数時間数を学生の各組に割り振ってゆく方法がある。1時間目と中間の時間、まとめの時間のどこを担当するかで授業の難易度に差が出るが、全体の流れはクラスに示すことができる。

ただ、この方法を指定した場合、模擬授業以前に担

当者全員が展開をしっかり把握して、各組の展開内容(やるべき範囲)を厳密に守る必要がある。これは初めての模擬授業に取り組む学生たちには難度が高いだろう。

ちなみに〈注1〉であげた山本康治氏の報告では、教材「ごんぎつね」を決めて、教員が「指導計画」や「指導過程」のモデルを提示された後で、学生に「場面」を選ばせて「学習指導案」を書かせていられる。8分の模擬授業に対する指導案であるので、学生には取り組みやすい方法であろう。

本授業では、基本的に教材選定に際し、各組の自由な選択を尊重している。それは、教材選択の過程で、教科書の中のさまざまな教材を吟味し、どれが模擬授業教材として適切かを考えさせるためであり、教材選択には、その狙いは生かされていると思われる。

そして、その上で、文章全体の構成や段落内容を押さえる国語の授業としての「要」となる時間に取り組んで欲しいとの稿者の思いもあるのだが、自由選択にした場合、「本時」の決定において、導入の時間を選ぶ組が多かったことは、結果的には学生には易きに流れたことになる。しかし、一方で本能的に「授業のしやすい箇所」、「教員の自由な創意工夫が生かせるところ」を選択しているところは、本学の学生の特性を發揮しているといえるだろう。

さて、全体の流れを掴み、その上で「本時」の果たす役割を把握するためには、対応策が優れているが、その難度のために失敗する可能性を考えると、学生にとってどちらが有効であるかは、判断がつきにくいところである。今後は、稿者の講義のなかで、読み解く(児童に読み解かせる)おもしろさを伝えてゆく工夫をする必要があると感じている。

5. 優れた取り組みと改善点

ここでは、学生の模擬授業のなかの創意と改善点について報告する。

本授業では、学生の作成した指導案をその他の学生たちに配付し、そこに、よかったところ、改善点、感想の三項目を書き込んで、まとめて担当者に渡すようにしている。毎回、他の担当者を批評する観点からみること、担当しない時間も、自らの授業への反省と今後の授業への気づきを促すようにしたかったためである。

全員の模擬授業終了後、その批評を読んで、反省点

を生かした「本時の授業」の訂正案とその説明、「模擬授業を経験した感想」をレポートとして提出させた。また、各自がもらった全員の意見・感想を書いた書き込み指導案も提出させて、学生一人一人の毎時の気づきも成績評価の材料とした。

同時に、稿者も学生と同じように批評を書き込んだ指導案を担当者に渡すようにしている。模擬授業終了後、学生全体にとって有益であると判断した改善点の指摘は、学生全体の前で行っている。しかし、担当者の改良すべき点を細部にわたりあげつらう形になることは、稿者にとっても避けたいところであるので、指導案への書き込み指導が有効であった。

その感想のなかでも多くの学生が支持したものを中心にあげてゆきたい。

5-1) 創意点

〈児童に自ら考える意欲を引き出す工夫〉

①クイズ形式を取る。

- ・「すがたをかえる大豆」を扱う中で、大豆加工品を一覧した後、その加工法を考えさせるクイズ
- ・大豆加工品の実物を持参してみせるクイズ
- ・接続の言葉を考えさせるクイズ
- ・「三年とうげ」に出てくる植物の名前から写真を当てさせ、さらに、その花言葉を問うクイズなど、いろいろなアイデアが登場した。児童役の学生も本気になって考えることができた

②給食献立表を用意して、大豆加工品を探す。

- ・児童に身近なところにある給食から考えて行く工夫
献立表はインターネットで探してきた

③季語を紹介した後に、グループで俳句を作らせる。

④自作の言葉遊びの詩を用意する。

- ・自分のアイデアで言葉遊びの詩を作ったので、児童役の学生も同じような詩を作るという活動を促していた

〈児童に積極的に参加させる工夫〉

①漢字を空に一緒に書いてゆく。

②本読みの順を分かりやすく指示する。

- ・句点読みをさせると、自由に着席している模擬授業の児童（学生）は自分の順番が分かりにくい点を克服している

〈導入の工夫〉

①「ちいちゃんのかげおくり」が冒頭の内容であるので、教科書の扉の詩から読んでいった。

- ・「扉、目次をみて下巻の国語の学習を見通す」という指導書に従い、指導の系統に配慮できていた

②作者についての情報や著作物を紹介する。

- ・まどみちお氏の有名な詩を紹介して、親近感を持たせた
- ・「ちいちゃんのかげおくり」の作者、あまきみこ氏の童話作品を、絵本を持参して紹介し評価された
- ・「三年とうげ」の作者、李錦玉（リクムオギ）氏が大阪生まれであることを伝え、親近感を持たせる効果があったのだが、説明がそれだけであったのが惜しまれた

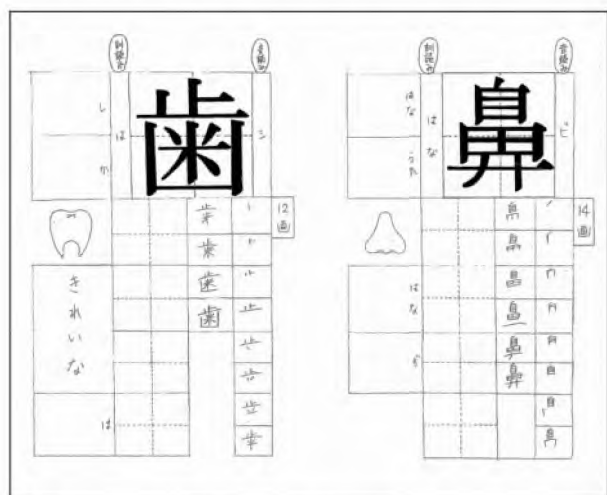
③国語に対する自分の思いを述べる。

- ・教師役の学生が自ら考えていることは児童役の学生の興味を引く。これは実際の児童に対しても同じことで先生が自らを開いて見せることは重要である

〈準備の周到さ〉

①図版・表を用意する。

- ・新出漢字を大きく張り出す
- ・板書をあらかじめ模造紙に書いて用意する
- ・大きなサイズでカラー写真を用意する
- ・物語に出てくる花の絵を用意して、物語の描く風景の美しさを理解させる
- ・教科書の挿絵を大きくコピーした紙を貼り、物語の展開が黒板1面で見えるようにする
- ・ワークシートを作る（図1）—児童一人ひとりに配付できるよう作成した



（図1）「漢字の意味」を学ぶために作成したワークシート

〈その他〉

①教師が音読してみせる。

- ・この方法を取ったのは1組だけであったが、初回授業で、段落を区切り、教師役の学生が大きな声でゆっくりと読んでいくことは物語の内容を伝えるの

に有効であった

②声の大きさに気を配る。

- ・はっきりとわかりやすく話したり、ゆっくり話したり、声が後ろまで届いているかを確認しつつ授業をする余裕があった

改善点についても、学生の記入からあげてゆく。創意点と同様に周到に用意したにも関わらず、それがうまく行かなかった例もある。

5-2) 改善点

- ・板書の字が小さい
- ・板書のバランスが悪い(右に詰まり、左が空く)
- ・板書が見える立ち位置がわからず、書いた部分をかくしてしまっていた
- ・声が小さい
- ・2~3人の組で教師役の分担の片よりや連携の悪さ(一人だけが多く負担している組も見受けられた)
- ・準備した図版や文字の見えにくさ
- ・誤った回答への指導の方法……………*1
- ・事前に調べたことが消化できていないので、メモばかりに気を取られた
- ・小学生では習わない読みなどを書いてしまった
- ・自分たちが分からないことは飛ばしていった
- ・児童全員に目が配れず、授業に参加できていない児童(学生)がいた
- ・板書の漢字の書き順を間違った
- ・指導案に書いた内容の通りにできていなかった
- ・指導案の内容で行ったが、時間が半分で終わってしまった

などがあげられている。

このうち、*1「誤った回答への指導の方法」については、児童の答え、発表をすべて板書していく例があった。児童役の学生の誤りを正すことに非常に気を使っているのは現代の若者気質であるのか、教師役の学生が予想しなかった回答に対処しきれいていないのか、気になったところである。

また、逆にクイズ形式で行った問題の解答が2通りあることが授業中にわかった例もある。この時の担当者は社会経験が豊富な学生であったため、両方の解答が成立することを落ち着いて説明できていた。事前準備の際に気づくべきことではあったが、それを乗り越える力は現場対応力でもある。

教師役の学生自身の国語力を高めて欲しいと思う改善点は、漢字そのものや、書き順の正確さにもあった。

また、経験不足からくる課題としては、新出漢字の学習の際に、常用漢字表外音訓まで示してしまったことがある。各学年に担当される漢字と読みには、段階的な配慮があることに気づいていないためである。教科書の後ろにあげられる「これまでに習った漢字」「この本で習う漢字」を示してこれに配慮するよう指導したが、「小学校学習指導要領 第1章 総則」に「学校の教育活動を進めるに当たっては……児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動を充実する」とあることの意味を深く捉えなければいけないだろう。各学年における目標を押さえ、「系統指導」の考え方にまで繋げてゆきたい(注3)。

また、「ちいちゃんのかげおくり」は戦争を扱った作品であるが、学生自身が深い知識を持たず、「怖い」「ちいちゃんがかわいそう」という程度の意識で授業に臨んでいた。作品の社会的背景や、作者の創作意図まで考えて読みを深める習慣を持ってほしいと思う。

全体において模擬授業では、児童役が学生であるため、それまでに「習っていないこと」に対する配慮が欠けてしまう。児童役が常識の範囲で答えてしまうことも多々あり、小学校での模擬授業では成立しない授業ができてしまうのである。今後の講義ではもっと認識を強めておきたい。

学生の評価は、「声の大きさ」「先生らしさ」「明るさ」「親しみやすさ」などについて触れ、「(ちょっと難しいけれど頑張ろうなどの) ポジティブな発言がよい」というような印象批評が多かった。しかし、模擬授業を終えた学生は、着目点が準備の丁寧さにまで多岐にわたり、自身の反省から、よいところを学ぼうとする意欲が見えたのが幸いである。

5-3) 課題の克服

この改善点にあげられた多くのポイントは、一度は人の前に立って実際の授業を行ってみたいとわからないことではある。つまり、失敗をしたことが大きな収穫になるといえるだろう。その意味で、その反省を記すレポートを課題としたが、本当はもう一度模擬授業をすることが大切であったと思われる。そこで、1回目の反省をどれだけ克服し、他の学生の見習うべき点を取り込めるかを試すことができるだろう。限られた時間ではなかなか困難なことではあるが、教えるべき内容を深く知るという意味で、国語(科目)の講義からもっと有機的に国語科教育法へと連携できるように、国語の講義内容を改善し、国語科教育法へと繋げてゆきたい。

6. おわりに

先に、本学の学生が現場対応力に優れた点があることを述べたが、それは、本来考える力を基にして発揮される。主体的に考えることを身につける方法として近年いわれているのが、能動的学修である。

大学の授業に対して出された、2012年8月の中央教育審議会答申の「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」という観点から、今、求められている小学校における「アクティブ・ラーニング」(注4)は「ある事柄に対する知識の伝達だけに偏らず、学ぶことと社会のつながりをより意識した教育を行い、(子供たちがそうした教育のプロセスを通じて)「自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協同的に探求」するための学習と捉えられている。

青山由紀氏は「アクティブ・ラーニングを生かした国語の授業づくり」(注5)の中で、「〈アクティブ〉とは表面的な活動ではなく、内的な活動、言い換えると「額に汗する」のではなく「脳に汗をかく」ことなのである。目指すは、個に教科の本質に即した力や、思考力、認識力(汎用的な力)を身につけさせることである」と述べられる。こういった指導を受けてこなかった学生たちが、自ら課題を発見し、解決策を見出せるようになるにはどうすればよいのか。「アクティブ・ラーニング」という言葉だけにとらわれずに、自ら脳に汗をかくて、現場で話し合いにきちんと介入する「指導力」を身につけるために、「考える力」を深める方法をさらに考えてゆきたい。それは学生たちが、教員となった時に、次の世代の子どもたちに求めるものになるはずであるからである。

〈注〉

1. この課題に関しては、本学同様、幼稚園免許と保育士資格取得を主な目標とする学生が殆どである短期大学で「国語科教育法」を担当される山本康治氏の実践報告の先例がある。「小学校教員養成課程『国語科教育法』実践報告」(『東海大学短期大学部(静岡)児童教育学科研究資料集』13・2005年)
2. 植松雅美編著・玉川大学出版部(2011年2月初版、2014年1月初版第3刷)
3. 筑波大学附属小学校国語教育研究部編『筑波発

読みの系統指導で読む力を育てる』(東洋館出版社・2016年2月初版)

4. 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(諮問)」(2014年11月)
5. 『「資質・能力」を育成する国語科授業モデル』(学事出版・2017年1月)

ピアスーパバイザーからのコメント

本論文は、本学における「国語科教育法」の授業の取り組みと課題についてのものである。論文中には、国語の模擬授業を行う学生の優れた取り組みが創意点として紹介されている。本学学生の模擬授業を工夫して実践している姿が伝わる。

一方、改善点についての記述もある。これらの改善点を、クリアしていくための「国語科教育法」の授業内容はどのようなものかについて、さらなる分析をしていくことで、学生自身が、国語の授業をよりよく展開できることにつながっていくと思う。

(担当: 林 幹士)